奈良と薬の古い関係

奈良県と薬の関わり

医薬は、人々が生きていく上で重要なものであることから、言い伝えや歴史書の中で医薬の神々との関わりが述べられています。[医薬の神々]

奈良と薬の関わりあいは古く、日本書紀には、推古天皇が現在の宇陀地方で薬狩りをされた（６１１年）という記述があります。[推古天皇の薬狩り]

古くは、寺院が薬と深い関係を持っていました。中国から医薬術の導入、薬の輸入などをして、民衆を病から救済しようという寺院がありました。有名な東大寺の正倉院には、当時のくすりが納められています。[東大寺正倉院]

いくつかの寺院では、それぞれ秘伝の処方による薬が作られ、施薬が行われました。

一方、お茶という形でも薬は一般に広まりました。[西大寺の大茶盛]

むかしは、薬というと大変高価で一般には手の届きにくいものでした。そのため、自分の健康を自分自身で維持するために、身近な薬草やその他の天然物を利用しようとして、様々な知識・経験が蓄積されました。こうして利用された薬草などを民間薬といいます。

２０世紀に入るまで、日本の医薬品の主体は、漢方・生薬処方でした。当時の医学の知識は、中国伝来の医術を基礎としており、用いられる生薬も中国のものが主流でした。

天産物である生薬の確保・安定供給は重要な問題でした。当時、高価な生薬を輸入する一方、国内でも調達できないものかと、薬用植物の栽培・採取が試みられました。中国などから種苗を導入するだけでなく、国内に自生する植物の中から利用・代用できるものあるいは、より日本人の体質に合ったものが探されました。[植村政勝の採薬行]

このような状況のなかで、大和（奈良県）では数々の優良な品種が確立されました。

その一方で、全国各地の薬を必要とする人々を相手に、薬を販売して廻る産業が興り、「置き薬」という独特の形態をとるようになりました。

現在でも、配置家庭薬として、全国の利用者にユニークな医療サービスを提供しています。

医薬の神々

医薬は人々の健康を守る大切なものとして、伝説の神々との関わりが今に伝えられています。古代中国の伝説に登場する神農は、医療と農耕の術を教えたとされていて医薬と農業を司る神とされています。

日本でも少彦名神が、薬の神として「神農さん」とも呼ばれ大阪の道修町の少彦名神社に祭られているほか、「日本最古の神社」と称されている奈良の大神神社に、大物主大神を主祭神とし、大己貴神と少彦名神が配祀されています。

大神神社では、毎年４月１８日に春の陽気による災難・疫病を鎮め、無病息災を祈願すため、鎮花祭が執り行われています。

大神神社（大神神社提供）

推古天皇の薬狩り

日本書紀には、推古天皇が現在の宇陀地方で薬狩りをされたという記述（６１１年）があります。

当時、獣狩りをされようとした推古天皇を、皇太子がお諫めし、中国の風習に倣って、代わりに薬狩りをするように進言し、聞き入れられたとのことです。

その後も、朝廷と薬物の関わりは深く、藤原京（６９４～７１０）跡からは、薬物のことを記した木簡（薬用人参等２５種）が出土しています。

薬狩り壁画（星薬科大学所蔵）

東大寺正倉院

東大寺正倉院の御物の中には、２１の漆櫃に納められた６０種の薬があります。これらの薬は単に奉献されたものではなく、一般への施薬を考えたものでした。すなわち、病に苦しむ民衆に分け与え、使った分は順次補充するというものです。

東大寺正倉院正倉（宮内庁正倉院事務所より提供）

奉盧舎那仏種々薬帳の中には、次のように記されています。「以前（列記した薬物の意）堂内に安置して盧舎那仏（大仏）を供養す、もし病苦のため用うべき者あれば、僧綱（東大寺の寺務所）に知らせて使用を許可する。伏して願わくば、この薬を服用する者は万病はことごとく除かれ千苦はみな救われ、諸善は成就し、諸悪は断ち切られ、長寿で夭折することない。そして最後に生命を終わったあと、蓮花蔵世界（極楽浄土）に往生し、盧舎那仏にお会いでき、仏法世界を体得できるように。」

奉盧舎那仏種々薬帳（宮内庁正倉院事務所より提供）

平安時代以降

都が京に移ってからも、薬用植物の栽培や輸入が続けられました。延喜式（９２７年完成、９６７年施行）を見ると、桔梗、芍薬等全国第五位にあたる３８種の薬用植物を生産していると記されています。

＊延喜式：律令の施行細則のことです。平安時代初期の禁中の年中行事や制度などのことを漢文で記してあります。

西大寺の大茶盛

茶は古くから日本に自生していたという説がありますが、はっきりしたことはわかりません。唐文化がさかんに輸入された時代に、わが国でも寺院などで、茶を薬用として使用することが広まって、喫茶の習慣もできたと考えられています。

現在のような形態での喫茶の用法は、留学僧の栄西（1141 ～ 1215）が種子を日本に持ち帰って、九州に植えたことから始まったといわれています。

栄西は「喫茶養生記」に『茶は養生の仙薬なり、延齢の妙術なり。』と記し、茶は五臓の働きを活発にし、長命にすると説いています。

その後、大和でも茶の栽培が広まり、般若寺や室生寺が大和茶の産地として知られるようになりました。

そのような中で、薬としての茶の大盤振る舞いが定着し、今では「西大寺の大茶盛」として、有名な観光行事となっています。

植村政勝の採薬行

植村左平次採薬経路図（森野旧薬園提供）

８代将軍徳川吉宗は、薬草に強い関心を持ち、小石川薬園（現小石川植物園：東京都文京区）を拡張整備するとともに、各地に採薬使を派遣しました。

採薬使のうち、もっとも大きな足跡を残したのが植村左平次政勝です。

植村政勝は、１７２０年から３４年間にわたって、８６回各地を踏査しました。

大和（現在の奈良県）には１７２６年と１７２７年に足を踏み入れ、１７２９年に１５０日間にわたる大旅行「伊賀伊勢紀伊大和山城河内６カ国御用」を行いました。その後も、１７３２年、１７３４年、１７３５年の３度大和を訪れています。

この伊賀伊勢紀伊大和山城河内６カ国御用には、宇陀郡松山町（現宇陀市）の森野藤助らが同行しました。森野藤助は、採薬行のあと幕府から薬草６種を拝領して、自ら採取した薬草とともに、（現在の宇陀市にある）自宅の背後にある台地の畑に栽培し、森野旧薬園を始めました。

大和売薬の始まり

江戸時代中期に大和の名薬として、米田の三光丸、藤井の陀羅尼助、中嶋の蘇命散が著名となりました。天明元年には薬種屋合薬屋株設立の願いがあがり、複数の業者があがりました。

１８世紀後半には大和の売薬は広汎な展開を見せていました。大和の配置売薬は富山のように藩の政策として拡大されたのではなく、民間の力で広げていった経緯がありますが、幕末の頃にはほぼ全国に行商圏を広げることができました。当然のことながら富山売薬と競合することになり、紛争を避けるためにもお互いに協定を取り交わす必要があり、大和、富山、加賀との間に取り交わされた「仲間取締役議定書連印帳」が残されています。

仲間取締役議定書連印帳
（三光丸クスリ資料館提供）